

日本語教師初任者(外国人児童生徒等)研修

第1回 日本に来た子どもの困難さと可能性 市瀬 智紀 先生(宮城教育大学)

1 イン트로ダクション

ー情報の活用に関する約束事

情報の取り扱いについて、お話します。

研修中にアンケートを行います。それは個人が特定されることがないように配慮し、研修の目的以外に使用することはありません。講師が講義した内容、ワークショップのテーマや方法、課題などを、教材として残し文化庁に提出します。また、今日、皆さんに配布した資料の一部を、出典なしに再利用しないようにお願いします。出典を口頭で申し上げることもありますので、資料の扱いには注意してください。

冒頭から、ご面倒を申し上げましたが、こういったルールがあるので、お願いを申し上げました。

2 研修の進め方について

講座の構成についてお話します。

この研修会は3本立てになっています。90分は講義の時間で、そこで知識や技能を皆さんに身につけていただきます。その後の90分はワークショップの時間。これは、協働で私がお話したことをもとに、皆さんの考えを深める時間です。その後の90分は振り返り及び共有の時間となっています。講義で学んだことを皆さんでシェアしていただき、自己評価シートに書かれている資質、子どもの日本語教育に関わる態度を養っていただく時間です。

次に、この研修会が目指す養成したい資質・能力について話します。この研修会で何が学べるかということをお手元の[自己評価シート](#)に明示しています。この研修会全体を通して、こういった資質・能力が身につけられるように11回の研修会が組み立てられています。

3 異文化間移動とは

主に家庭の事情(父母の生活上の理由など)から、児童生徒が成長期に複数言語、複数文化間を移動することをさします。もちろん児童生徒なので、自分の意志で動いていくものではありません。

福島や仙台では、中国から日本、フィリピンから日本への文化間移動が多いのですが、お父さんとお母さんの文化が違い、日本に来る前にいくつかの国を移動し、日本に来て、また他国に動いていくといったお子さんもいます。

移動する中で、自分自身が持っている文化と周りの文化に対する認識が変化していく。もともと持っている自分の文化が自文化であるという認識から、周りの環境の文化が自文化であるという認識に変わ

ってくる場合もあるし、そうじゃない場合もあります。このように異文化間を移動することによって、言語の習得や、成長・発達、アイデンティティの形成にさまざまな影響を与えることが考えられます。

私自身も、自分の中にある複数の文化を使い分けて自分のメリットにしています。

文化間移動の子どもの事例を2つ紹介します。

事例①

子どものころ(小学3年生から6年生)日本に滞在し、その時身につけた日本文化の影響が強く、帰国後も、アニメやインターネットで日本や日本文化とのつながり、アイデンティティをキープして、成人して日本に戻ってきてそれを活かした仕事に就くというライフコースをとった人

事例②

小学生時代に日本に滞在し、日本語も上手に話せていたが、日本語にも日本文化にも興味はなく、帰国後はほとんど日本語を忘れてしまった人

文化間移動の影響は来日の時期によっても違いますが、その人がどんなアイデンティティをキープしていくのか、本当に個人差が大きいですね。また、アイデンティティは成長に伴って変化していきます。この人はずっとこんなアイデンティティだと言えないのも文化間移動の特徴かと思います。

ウィリアム・マクマイケルさんの事例を紹介します。ウィリアム・マクマイケルさんは福島にお住まいで、震災後、早稲田に招かれてご講演されました。その時の話を早稲田大学川上先生が本にされているので紹介します。『日本語を学ぶ/複言語で育つ-子どものことばを考えるワークブック』(川上郁雄著)のp70-p73

マクマイケルさんは、カナダ人のお父さんと日本人のお母さんのもと、カナダで生まれました。5歳から8歳までの3年間、徳島に住みました。その後、カナダで生活し、2007年から国際交流員として、今は福島大学の職員として国際交流の仕事に携わられています。特に東日本大震災以降、被災者の支援に取り組むとともに、福島の姿を発信する活動をされているたいへん有名な方です。

皆さんに、マクマイケルさんの話を読んでいただいて、気になるところに線を引いてみていただきたいのですが、時間の関係で今回は、私が気になることを指定します。

5歳の時に日本にやってきて、徳島に住んだときは、

すごく珍しがられて、みなさん仲良くしてくださいました。テレビにも時々出ていましたし、自分たちの中ではちょっとした「有名人」という感じでした。このような環境にいましたので、日本が大好きになりましたし、言語もアイデンティティもすっかり「日本語人」になっていきました。
『日本語を学ぶ/複言語で育つ-子どものことばを考えるワークブック』(川上郁雄著)より引用)

ということで、かなり幸せな、注目され目立つ少年時代を送られたのかなと思いました。

その後、カナダに行かれるんですが、

カナダでは小さなカルチャーショックもいろいろありました。たとえば鼻血が出て、トイレに行ってティッシュを鼻に詰めて帰ってきたら大笑いされて、3年くらいそのことを言われました。(同上)

どうですか。どこが笑いのツボだったのでしょうか。何が悪いんでしょうかね。とにかく向こうではそういうことをしないんでしょう。これは、文化適応の問題ですね。そして、3年くらいそのことを言われてトラウマになったという話がありました。

ところが、さっきの事例①の子と同じですが、マクマイケルさんは、日本や日本語に対する気持ちを持ち続けていました。

カナダにいと日本語にすごく飢えるようになるんですね。それで日本語のものだったら何でも読みたい、見たいという思いが強く、日本語の雑誌があったら「それ、ちょうだい」と言って読んだりしていました。カナダには日本の雑誌があまりなかったもので、日本から持ってきた本や、現地で手に入れたコミックを200回、300回読んだりしました。(同上)

リソースが少ないですものね。今はSNSがありますから、そんなことしなくても、バンバン情報が入ってきます。今から15年~20年前くらいの話ですね。それから、日本語の補習校にも行っていました。ご両親の働きかけが強かったのかなと思います。そして、日本語能力検定試験の1級に14歳で受かってしまいました。8歳くらいまでしか日本にいなかったのに、すごいんですね。それから、日本人の友達もたくさん探して、キープしようとしたということも、我々の第二言語習得としての英語学習と似ていますね。

最後のところがまとめになると思いますが、マクマイケルさん自身は、読み書きとか語学とか価値観

徳島の生活の中で、日本語をどんどん覚えていくと、今度は私の「スター時代」が現れます。徳島には当時あまり外国人がいなかったので、

とか潜在的なものは日本人寄りで、大学や学校などアカデミックなものやビジネススキルとか、ソーシャルスキルは英語人よりかなと言っています。2つのところに立脚しているんです。

このような、マクマイケルさんの事例は成功した場合の事例ですね。このように、マクマイケルさんのように成功例でも、アイデンティティクライシスというのがあります。自分は英語がネイティブな日本人なのか。日本語ネイティブなカナダ人なのか。カナダ人には日本人と呼ばれるし、日本人にはカナダ人と言われるし、どっちにも属さない。そのことに関して非常に迷う時期もあったようです。これが思春期と重なったんですかね。それをどうやって脱したのかというと、

要は、私はどっちにも属しているんです。両方なんです。カナダ人であって、日本人であって、英語人であって、日本語人であって。両方もわかるから凄くお得なんだと思います。この考えが、アイデンティティクライシスを抜けるきっかけとなりました。』(同上)

つまり、自分の持っているさまざまな文化的背景をマイナスで捉えるのではなくて、これは使えるぞというように、自分自身それを適応させていく。それがアイデンティティクライシスを抜ける一つのきっかけだったんじゃないかと語ってくださっているんですね。

個人によっても差がありますが、2つの文化的価値をネガティブにとらえてダメにするか、ポジティブにとらえて活かそうとするのか、思春期を脱した時点で、態度が分かれると思います。

4 エスニックコミュニティについて

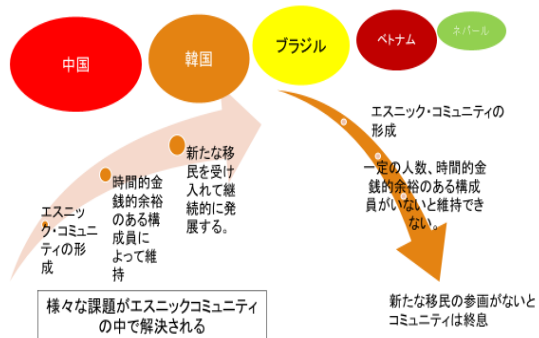
エスニックコミュニティとは、日本に住む外国人がそれぞれのグループを作って、さまざまな情報を提供したりして、日本という異文化の中で生活している、日本という異文化の中で浮かぶ島のようなものですね。

福島の最大のエスニックグループは中国ですね。フィリピンが2番目ですね。その次はどこかという、フィリピンを追い抜こうとしているのがベトナムですね。韓国・朝鮮籍の方は少し減少しています。ネパールの方は増加しています。どんな背景を持た

れている方が多いんでしょうかね。全体として配偶者の方が多くて、震災を機に、宮城もそうなのですが、また増加してきています。フィリピンはお嫁さんが多いですね。フィリピンはお嫁さんとか言うと、またステレオタイプで怒られちゃうんですが。じゃあベトナムの方の数が伸びていますけれども、どんな方が来られているんですか？技能実習生です。どんな技能を持って、どんな産業につかれていますでしょうか。製造業につかれています方が多いですか。都市部が多いということですね。実は、私のゼミに珍しくベトナム人の留学生がいます。福島で就職したんですよ。福島のホテルはベトナム人の研修生の方を呼び込みたかったんだと思いますね。韓国・朝鮮の方は旧来からいらっしゃる方が多くて、人口が減少している現象は全国的に見られますね。次に増えているネパールの方というのは、どういう背景の方が多いんでしょうか。カレーなど飲食関係、留学生の方でしょうか。

エスニックコミュニティを形成するにはそれ相応の基盤が必要です。金銭的、時間的余裕のある構成員がいて、次から次と新陳代謝があつて、世代が補充されていき、そのコミュニティに属するメリットがあり、さまざまな課題がそのコミュニティの中で解決されるとエスニックコミュニティは維持されていきます。技能実習生や留学生といった忙しく移動が頻繁に起こる世代だけだと成立しにくいものです。

エスニック・コミュニティとは？その生成モデル



私の妻も、中国人のエスニックコミュニティに属しています。そこでは、中国語のスピーチコンテストをやったり、新年会をやってみたり、映画祭をやってみたり、舞踊をやったりしています。日本人のお祭りがあれば、それに行き披露したりしています。大使館で用事があればそちらに行ったり、大使館の招きで中国に行ったりすることもあるんですが、自分たち自身でいろんな情報を取り合つて、親交を深めるという機能が一つと、もう一つは、日本社会に貢献したいという気持ちがものすごく強いと思います。日中関係の中で、状況を改善していきたいという気持ちが強いのかと思います。このようにエスニックコミュニティは、自分たちの中で親交を深めたり困っていることを解決したりする機能と、日本社会と自

文化をつなぐ役目を果たしていると思います。また、新たな移民が入らないとコミュニティは収束していきます。例えば、韓国の民団（在日本大韓民国民団）さんも、非常に勢力が大きかった時代もありましたが、だんだん規模は小さくなってきています。宮城の民団さんは、以前は母語教室とかもやっていましたけれども、なかなか人が集まらなくなってきているという話も聞いています。エスニックコミュニティは固定的なものではなく、時代とともに変わっていくものです。

最近エスニックコミュニティも、昔みたいに皆で集まって同国出身者同士でわいわいやるってところから、ずいぶん形が変化しています。その原因が何だかわかりますか。今、ソーシャルネットワークサービス上でコミュニティが簡単に作れてしまいます。そうすると、距離が離れているか近いかはあまり意味がなくなります。今までは、近いから皆で集まってということでしたが、今は SNS で、いつでも母国のお母さんと話せるし、隣県や東京にいる人にもいろいろ相談できるわけです。つまり、エスニックコミュニティにわざわざ集まって、話す意味がほとんどなくなってきているという感じがします。以前のように固定的な形でコミュニティを作らなくても、仮想空間上で、エスニックコミュニティが形成できるようになってきたということです。それが与える影響を我々は見通さなければいけません。もし、人々がバラバラで、固定的なエスニックコミュニティがなくても、自分の母語だけの中、SNS の中で生存して行けるなら、周りの人と交流する必要がなくなるわけですね。そういう意味で、SNS は、非常に役に立っています。最近では仙台の相談コーナーにも、悩み相談が減ってきているといわれています。SNS で母国人に聞けばわかるし、そこから情報をもらったほうが、母国語で書かれていますから、すぐにわかります。

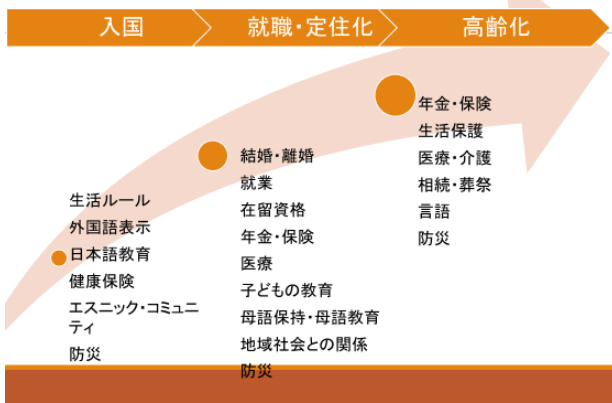
それはいい面もありますが、近隣の日本人と交流する必要はないということにもなってきます。社会統合という点ではどうでしょう。今後、この動きは、社会的にも注目すべき点だと思います。

構成員のライフステージによって、エスニックコミュニティの課題が変わってきます。来日したばかりの時は、生活ルール、日本語教育、健康保険の入り方、防災、そういったことが問題になってきます。定住してきますと、結婚離婚、子どもの医療、母語保持、そういったことが問題になってきます。そしてもっと年を取ってくると、年金、保険、介護や相続のことが問題になってきますね。年金や介護、外国人にとって何が問題なのだろうって皆さんピンとこないかもしれません。例えば、私の家庭の話をする、年をとったら老人ホームに入ることを考えます。老人ホームの中では母語が使えません。そうとなると、自分の国の老人ホームに入ったり、エスニックコミュニティで老人ホームを作ったりしたほうが、安心できる

となってきましたね。年金がきちっと溜まっていない場合には、年をとったら母国に戻ったほうがいい、そのほうが楽だという話もあります。また、ご主人が亡くなった時の相続、一人で生きていくにはどうすればよいか、今そういうことを考えるステージに入ってきていると思います。特にたくさん外国人の方が来て、そのピークを迎えたエスニックグループの場合には、こういったところにフォーカスが当たりつつあると思います。

このように、エスニックコミュニティの課題は、やはり時間と共に動くものだし、最近 SNS のこともあり、急速に形を変えてきています。

ライフステージにあわせたエスニックコミュニティの課題



以上が外国人児童生徒の背景としてのお父さんお母さん、保護者の世代の話になります。保護者の方がこうしたコミュニティに入っているかどうか、孤立しているかどうか、外国人児童生徒の支援に当たっては、重要なポイントになってくると思います。

5 集住と分散

福島県は、分散地域になります。つまり外国籍の児童生徒が、分散されて住んでいます。

外国籍の児童生徒が集中して住んでいるところは、集住地域といいます。今、全国で外国人児童生徒が100人以上いる公立学校が7校あるそうです。愛知県の小学校では、全校生徒の半数以上が外国人という学校も増えてきました。提示しているのは愛知県の事例ですので、日系ブラジル人就労者の子どもの多いということになります。どのように対応しているのでしょうか？

やはり、段階別の学習ということになるかと思えます。特別教室では、来たばかりの子どもを対象に、初歩的な日本語の指導や文字の指導をしています。その後は、算数や国語を、2学級を3つの習熟度別に編成しています。国語の場合、Aクラスが一番進んでいるクラスです。このクラスでは教科書をちゃんと読んでいます。Bクラスは、教科書の本文を書き換えて、書き換えた本文(リライト教材)を使って指導さ

れています。Cクラスでも、リライト教材を使っているようだけれども、実は日本語の指導をしているという感じですね。その3層に分けて、先生方は苦労されながらやっていると思います。同じ教科書を使っているといっても、ちゃんと使えているのはAクラスだけ。後は、日本語の指導に国語の学習を使っているということになります。

集住地域では、6割以上が外国籍の児童という学校(東京都立大久保小学校)もあります。私の大学も教員養成大学ですが、卒業生がそういった学校に行くと指導するということが多くなってきました。そして、外国人の集中率が、9%、10%というところもあります。

外国籍者の集住する都市

群馬県—伊勢崎市、太田市、大泉市
 長野県—上田市、飯田市
 岐阜県—大垣市、美濃加茂市、可児市
 静岡県—浜松市、富士市、磐田市、掛川市、袋井市、湖西市、菊川市
 愛知県—豊橋市、豊田市、小牧市、知立市
 三重県—津市、四日市市、鈴鹿市、亀山市、伊賀市
 滋賀県—長浜市、甲賀市、湖南市
 岡山県—総社市

福島県は、日本語指導が必要な児童生徒は、人数的には100人程度ということですね。宮城県もだいたいこんな感じですね。その割には各学校に行くと、小さな学校でも1人や2人は、指導が必要な生徒がいるということですね。公立では外国人児童生徒が255人いるということですね。これは震災の影響もあって減りましたが、また最近少しずつ増えてきているという感じです。

分散と集中ということで、東北地方に見られる小中学校の分散地域の様子はどうかということになりますが、実は私、このスライドを15年くらい使っているんです。すごいですね、15年も使えてしまうということは、状況がぜんぜん改善されていないということでしょうか。

(スライド)

- 学校の外国籍児童生徒は一人
- 日本人の父親と外国籍(中国・韓国・フィリピンなど)の母親
- 編入後は校長先生や教頭先生が空いている時間に対応(聞き取りや漢字の学習)
- ボランティアや指導協力者が、日本語の補修をする。
- 母語支援として、学級で、ボランティアが子どもの傍らに座って通訳

では、先生方から聞き取った外国人児童生徒の困難の事例をお話させていただきたいと思います。国名を書いています、ステレオタイプのこの国がこうだと言っているわけではありません。

<韓国 小学1年生>

最初は日本語が話せなかったのが、コミュニケーションが全く取れませんでした。それはそうですね。最初、クラスに入ってくると、皆珍しがって寄ってきて、人気者になるんだけど、1週間経つとさっぱりというのが、多くあるパターンだと思います。言葉が通じないのが本人にとって非常にストレスで、泣いたり走ったりするといった行動がありました。特別支援の課題とも重複してくるのかなと思います。

<アメリカ 小学4年生>

日本語の語彙力が圧倒的に少ない、漢字がぜんぜん読めないという課題がありました。計算式は解けるけれども、文章問題で論理的構成になってくると、何を書いているのかわかりません。また、自分はクリスチャンなので、七夕などの行事には参加しないと、参加しませんでした。七夕って宗教性あると思いますか？ これは議論が必要だと思います。

<フィリピン 中学生>

日本語は会話程度できる状況でした。フィリピンと言っても、いろんな島があって、たくさんの地域に分かれていますので、成績の管理とか情報の管理とかが行き届いていないところもあります。そこで、来日前の生活や学習の状況がぜんぜんつかめませんでした。また、フィリピンだから英語だろうと思って、英語で話しましたが、あんまり答えてくれません。どこまで通じているのかわかりません。どうですか？ フィリピンなど東南アジアって英語が通じるんですか？ 日本の小学校英語でもそうですが、都市部のお金がある人の子弟の英語力は高いですが、農村部とか地域で、英語教育をそんなに受ける機会がない生徒さんは、それほど英語力は高くはありませんね。ですから、それは我々日本人の思い込みですね。日本でもそういう傾向が出ていますよね。所得があって教育を受けられる子弟の子の英語力は高くなるということが多いです。この場合は、英語で話しても通じなく、母語が何なのかもつかめなかったということです。また、言葉が通じないので、些細なことから喧嘩になったそうです。母親が日常会話程度しかできないので、学校の連絡が正確に伝わりませんでした。このことについては教材とか方法があるんですけど、私の担当ではないので、残念ながらお話しはしません。そういう

回がありますので、ぜひ勉強してみてください。いろんな方法がありますね。学校からのお便りをトランスレートする方法とか、要点だけ切り取る方法とかありますね。

<中国 中学2年生>

学習でもいろんな態度とか状況がありまして、こちらの生徒さんの場合には、中国では音楽や美術のような実技系科目が重要視されていないので、ぜんぜん経験していませんでした。日本では、結構技能教科の点数が高校入試で加算されます。また、「後で通訳の先生に聞けばいいや」と、通訳に依存していました。父親が教育に関わってくることはほとんどなく、連絡は通訳を通して母親に伝えられ細やかな連携が取れませんでした。日本人の父親は教育に無関心でした。また、母親が部活動や課外活動に積極的にかかわろうともしませんでした。特別活動や課外活動の意義が伝わっていませんでした。

<インドネシア 小学生>

イスラム教の習慣で食べ物に制限があるということで、主食ではおにぎりは食べられるが、給食のパンは食べられないと言っていました。これは何が問題なんですか。何が食べられて、何が食べられないのですか。どういう指導をすればいいんですか？ そうですね、アルコールを使って製造しているパンと使っていないパンがあるので、そのチェックが必要です。おにぎりは、アルコールが入っていないから大丈夫ということになりますね。また、食べ物の制限は豚肉がダメ以外にもいろいろとあります。ラードのような動物のエキスが染み込んでいるか、染み込んでないかが大事なのであって、豚肉かどうかという問題では基本的にはないということです。また、ラマダンの期間は昼間飲食ができない。断食の時間が終わると水なんかを飲んだりする。

また話が脱線しますが、私の教えている留学生は、ラマダンの期間中はつばも飲み込んじゃいけないと言っていました。非常に難しいですけども、戒律の厳しいところは、そうなのかなと思います。一方、私の知っているイスラム教徒の人で、せっかく日本にいるから、とんこつラーメンが好きで、とんこつラーメン屋にしょっちゅう行っている女子学生がいました。そういう人もいるのかなと思います。

また、肌を出すことは禁止、水泳の時間も水着にならない。これはどうしたらいいですか。水泳の時間、

水着にならない。じゃあずっと欠席になるのでしょうか。イスラム教の人って泳がないんですか。そんなことはありません。Tシャツみたいなのを着て泳ぐことになっています。何かを着て入ることになります。また、女子生徒に対する男子教員の配置とかについてもいろんな話を聞きました。これらの話は比較的軽い話なのかと思います。

いろいろ深刻なお話も伺っています。例えば、ある国から生徒さんを受け入れたのですが、お弁当を持ってこいと言っても持ってきません。その子のお弁当を開けたらほとんど何も入ってなくて、柿の種だけ入っていました。貧困や家族のケアの問題について話をしてくださった教員の方もいらっしゃいました。おそらく、家庭内で性的な虐待があるのではないかと知っている先生もいらっしゃいました。そこを踏み込んで調べるわけにもいかないですから、そういう可能性があるんじゃないかという疑いのある生徒さんがいるという報告をしてくださった先生もいました。

このように背景も色々ですし、どこの国だからどうだってこともないですし、さまざまな課題に対応して多様性の中でいろいろとやっていくということが、これからの私たちの教育に求められる姿なのかと思います。

またDVとか貧困とかの問題を、日本文化はとか日本のという文脈でお話しする方もいると思うのですが、世界で人々が文化間移動をしている現在、文化固有の問題ではないと考えられるのではないのでしょうか。今は人々が動いて、いろいろな国の中で仕事をするという状況になってきているのかと思います。

6 多文化共生

多文化共生ってよく聞く言葉ですけども、私の認識では、多文化共生というのは、現実にあるものではなく、多文化共生に向かって、いろんな葛藤を抱きながら、その方向に向かって進むということではないのでしょうか。つまり多文化共生社会というものが成立しているのかと言えば、成立していないと思います。いろいろな矛盾があるということですね。どの国も、どこの地域でも苦しんでいる。あそこは多文化共生の理想の国ですとか、理想の地域ですとか、そういうのは地球上どこにもないと思いました。

宮城県は多文化共生条例というものを2008年に作りました。この条例をみると、多文化共生というものが、どういうものなのかということがわかると思います。この条例ではこういうふうに言っています。国籍、民族などの違いに関わらず、県民の人権の尊重及び社会参画が図られる地域社会の形成を促進し、もって豊かで活力ある社会の実現に寄与することを目的とする。

多文化共生社会の形成の推進に関する条例 (定義)

第一条 この条例は、多文化共生社会の形成の推進について、基本理念を定め、並びに県、事業者及び県民の責務を明らかにするとともに、多文化共生社会の形成の推進に関する施策の基本となる事項を定めて総合かつ計画的に施策を推進することにより、国籍、民族等の違いにかかわらず県民の人権の尊重及び社会参画が図られる地域社会の形成を促進し、もって豊かで活力ある社会の実現に寄与することを目的とする。

第二条 この条例において「多文化共生社会」とは、国籍、民族等の異なる人々が、互いに、文化的背景等の違いを認め、及び人権を尊重し、地域社会の対等な構成員として共に生きる社会をいう。

多文化共生社会の形成の推進に関する条例 (基本理念)

第三条 多文化共生社会の形成の推進は、豊かで活力ある社会の実現には国籍、民族等の違いにかかわらず、次の各号に掲げる事項が必要であることを旨として行われなければならない。

- 一 個人の尊厳が重んぜられること、個人の能力を発揮する機会が確保されること等により県民の人権が尊重されること。
- 二 県民が地域社会の対等な構成員として地域社会における様々な活動に主体的に参画すること。
- 2 多文化共生社会の形成の推進は、県、市町村、事業者、県民等の適切な役割分担の下に協働して行われなければならない。
- 3 多文化共生社会の形成の推進は、国際的な人権保障の取組に留意して行われなければならない。

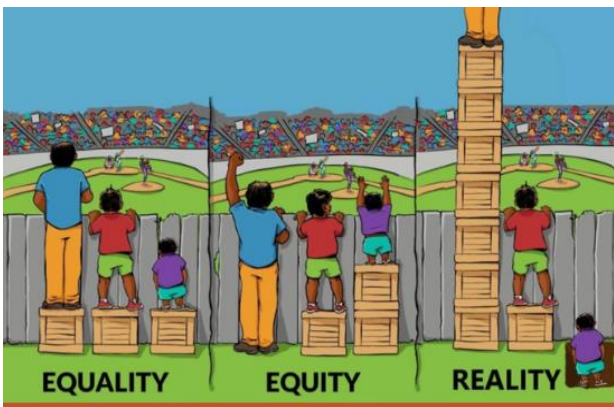
ここには非常に深い意味があると思います。国籍、民族などの違いに関わらずというのは、いろんな人、例えばアイヌとか、先住民の問題もありますので、国籍、民族の違いがあるから、それでは言っていないです。また、基本的には、人権の尊重が共生の理念と共にあります。そして、社会参画を図ると言っています。そういう人たちに、社会に参画して欲しいという

ことです。最終的には何がしたいのかというと、そういう人たちが加わって、活力がある社会を実現して欲しいというコンテキストなんですね。

多くの多文化共生に関する法令や目的や政策がありますが、だいたいこういう文脈でできています。社会に入っていただいて、貢献していただくということですね。第二条にも、地域社会の対等な構成員として共に生きる社会をいうと言っています。私も宮城県で多文化共生条例の推進をやっていますので、県の職員たちに研修させていただくことがあります。そうすると、職員の方が、必ず私に疑問の目を向けるんです。「どうして外国人の人だけ、特別にケアするのはですか?」と、おっしゃいます。皆さんどう思われますか? それに対してどう答えればいいですか? なぜ外国人だけ特別に税金を投入してケアするのかっていう、職員の方の疑問かもしれません。そういうふうに思われる方は、少なくないのかと思います。黙っていても、心の中で思っている人もいるでしょうし、民族的対立、ヨーロッパとかアメリカとか、そういう考え方もあるのかと思います。

個人の尊厳が重んぜられること、個人の能力を発揮する機会が確保されること、そして対等な構成員として主体的に社会に参画して欲しい。そして、事業者や県民が協働して共生社会を作っていく必要はないかと、条例には書いてあります。基本的には、国際的な人権保障の取り組みに留意するということです。

皆さんこの図をみてどう思いますか? Equality は平等、Equity は公正ということ。Reality は現実です。では、我々の目指しているのはどういう社会なのでしょう。どの画像が、多文化共生社会の概念に近いのでしょうか。真ん中と左ではどう違いますか。全ての人が同じ土俵に立てるまで支援しますよという、真ん中が共生の支援ということになります。



(出典: <https://interactioninstitute.org/>)

全ての人に平等に何かを与える、つまり日本人も外国人も平等でなければいけないという発想ではないんですね。外国人の方に言語的な支援を与える、職業的な支援を与えるという意味は、日本の方と同じ

ところまで持っていくためのものであって、それ以上のものではない。そのことがあまり理解されていなくて、「どうして外国の方にだけ」という発想になるのかと思います。本旨としては、同等の世界に立つための支援だという部分が、多文化共生の条例の基本的な理念になっているのですが、そう読めないとおっしゃる方も多いです。そこは説明不足の部分も多いのかと思います。

ただし、現実の社会はどうでしょうか。やっぱり富のある人はどんどん上にいって、富の無い人は結局何も見えないという状況に近いでしょうか。これ(右の状況)は経済的な支援が与えられないと、こういう状況になると思います。多文化共生が何を意図しているのか、Equity という言葉をぜひ覚えていただきたいと思います。

是川さんという人が就学率を分析されました。(Table 2: Educational Achievement of foreign immigrants living in Japan more for than 5 years (Korekawa 2012))

中学校に行っている割合というのがあります。韓国・北朝鮮、中国、フィリピン、ブラジル、アメリカ、イギリスを比較しています。これは日本国内の話です。中学校の場合は義務教育ですので、ほとんど行っていることになっています。ところが、高校の就学率を見てみると、日本人は97%、日本に住んでいるイギリス人98% (インターナショナルスクールも含めてですね)、アメリカ人も (通信教育をしている人も含めて) 87%の人が高校に通っています。ところが、ブラジル人は42%、フィリピン人は60%と、これくらいの比率しか、高校に進学できていないというデータを是川さんは論文で示されています。一方、中国や韓国は、進学意識が高いので、経済的にも苦勞しながらやっていることになりそうですね。これはいかがでしょうか。やはり学習支援も必要だということになってくるのではないかと思います。

階層的な移動のデータもあります。学校を卒業して収入の高い職に就けているのかに関しては、常に日系ブラジルやフィリピンの方は、日本よりも下に来てしまいます。ところが、中国とか韓国の方で修士を卒業された方は、日本人の所得よりも上の所得を日本において得られているという統計が出てきています。ちゃんと勉強するかどうかで所得格差につながってきています。

もう少し多文化共生の話をさせていただきます。これはオーストラリアやアメリカなどの移民国家の例ですけれども、職場に行くと、いろんな国籍の人が窓口に出てきます。日本ではどうでしょうか。国際交流員など短期的に欧米系の方が雇用されるというのはありますが、外国人の状況を勘案して外国人を雇

用するまでは至っていません。もう少しパーセントを上げないといけないのではないかと思います。

次に、福祉政策ですけれども、日本だと外国籍者の長期滞在を意図していないため、外国籍者の無保険・無年金が問題になってきています。移民国家だと、年金政策などに包括されています。

移民国家では、民族ごとのエスニックコミュニティが存在していますが、日本ではエスニックコミュニティが不安定です。また、ハラルフードが提供できるようなレストランは福島にどのくらいありますか。仙台だと外国の方がたくさんいらっしゃるの、いろんなレストランで、ベジタリアン対応ができるように、ここ10年くらいなっています。このことで外国籍の人はひじょうに助かっていますね。エスニックコミュニティが発達してくると、エスニックメディアを運営したり、エスニックフードを提供したりする方が出てきます。日本では、民族・宗教ごとの行事はないけど、シンガポールではラマダン明けの行事をやっていたり、中国の春節が国民の休日として確保されていたり、寺やモスクがあったりします。福島ではどうですか。仙台では東北大の中にもモスクあります。

それから、言語サービスですね。移民国家では、情報が多言語でもたらされます。公用語を学ぶことが公的サービスで担保されます。つまり日本語を学ぶことを国が保証しますというサービスがあります。日本では、多言語でもたらされる情報はわずか、日本語教育はボランティア頼み、母語保持に対して税金を投入するということはありません。仙台市でもかなり議論しましたが、結局予算はつきませんでした。

移民国家だと多民族混在の住宅政策とかもあります。外国籍の人がアパートを借りるとき、保証人まで必要で本当に苦労します。また、外国人は基本的にローンが組めません。中国人のお金持ちの方は現金一括払いでマンションを購入していますが、ローンで買おうとすると、外国人にはそういう権利がありません。

教育の現場では、移民国家では、移民のための特別学級の編成とか、母語別の進路系統、つまり中国語でそのまま行ける学校とかがあります。日本でも中国人学校がありますけれども、中学・高校・大学まではありません。日本の教員には国籍条項というものがあります。外国籍の方がいると、後輩の外国出身者の支援ができます。しかし、現実には日本の国籍を持たない教員は講師にまでしかありません。私の働いている教員養成大学に教員免許状を取得する外国籍の生徒は一人もいませんが、日本国籍じゃないと、教壇に立てないので、教員養成大学で勉強しても意味はないということです。

地域コミュニティですけれども、町内会や自治会を含めて、外国籍出身者を入れる経験が少ない。これは多文化共生の大きな課題になっています。やはり近隣との交流は、防災や防犯といった観点からも考慮すべき点ではないかと思います。

7 学校・地域・家庭の言語環境と言語使用

ポケモンGOの開発者の野村達雄さんという方が残留孤児のお子さんだったのを知っている人はあまり多くないと思います。ご本人もあまりそういうことを強調していません。どういう経緯かと言いますと、お父さんお母さんは中国帰国者につながるご家族で、黒竜江省(旧満州)で、お豆腐を売りながら貧しい生活をしていました。それで、日本に来たらなんとかなるんじゃないかと、野村さんが9歳の時についでを辿って長野県に移住することになりました。もちろん、今、中国は豊かですが、20年前の話ですからね。どうして長野県だかわかりますか？ 満州開拓団をいちばん出していたのが長野県だったんです。満州開拓団だったので、その関係で長野に来られました。その中で苦学し、信州大学に入学し東京工業大学大学院に進学されました。卒業後Google社に入り、Google Mapの開発に携わりました。そしてポケモンGOを開発しました。

この方は小学校3年生の時に、日本の学校に入ってきました。その時の野村少年の母語は中国語でした。そのときの家庭内の言語ももちろん中国語ですよ。野村さんが宿題を持って帰ってお父さんお母さんに聞いて、お父さんお母さんはどういうふうに教えたんでしょう。それもこの本に書いてありますがどう思いますか。中国語で理路整然と教えてくれたんだそうです。教えてもらって頭の中ではわかっているけど、小学校ではぜんぜん答えられないし、説明もできなかったそうです。つまりアカデミックな用語のシフトができないので、結局宿題は出せないまま、わかっているけど答えられないということですね。

家庭での言語使用がもし外国語だったり、日本語の使用が貧困だったりすると何が問題になってくると思いますか。学校では日本語で授業を受けているけれども、家庭で主に母語が話されている場合、ここでの問題ってなんだと思いますか。生活上の基本的な語彙が身につけていないということになります。生活上の基本的な語彙は、どのような語彙が抜け落ちることになるのでしょうか。習慣に属するものですか。「いつてらっしゃい」とか「いただきます」とかありますが、いちばん影響が大きいのは和語系の動詞です。例えば、「布団を敷く」とか「ご飯をよそう」という言葉が使えなかったりします。「ごはんを炊く」は外国の人だと「ご飯を作る」と言ってしまうですね。他には、「歯を磨く」を「歯を綺麗にする」と言っ

しまいます。つまり、日常的な生活語彙のインプットがないと、その部分語彙がかなり不足すると言われています。教科書の『ごんぎつね』とか『スイミー』はまったく日本語と日本文化の世界ですよ。この人はそういう言語環境でたいへんだったと言っていました。野村さんはそのうちパソコンに興味を持って、何とかパソコンを手に入れたいと思いました。中学校のときにパソコンが手に入り、夢中になりました。パソコンを使っても日本語の上達があったと思うんですが、みごと国立大学の工学部に入られました。たいへんだったと思いますよ。小学校の時に中国から来て、日本を代表するソフトを作られることになった、キャリア形成のひじょうにいいモデルではないかと思います。(参考：『ど田舎生まれポケモンGOをつくる』野村達雄著)

タレントの渡辺直美さんがどういう文化背景かご存知ですか。渡辺さんがおっしゃっていたのは、今でも大喜利とか漫才とか、何を言っているのかわからないそうです。聞いてもわからないし、振られても答えられない、番組に出てもただ座って笑っているだけだそうです。じゃあ自分は何をやればいいのかと思い、アメリカに留学して、ダンスで表現していこうと考えられたんだそうです。これもキャリア形成の一つの示唆になると思います。なにも難しい学習言語を勉強しなさいということではなくて、自分の活かし方をどうやって見つけていくのか、そこをどうやって支援できるのか。この方は、教員がどういうアドバイスしたのかわかりませんが、中学校で学校を辞めてしまって、身体表現で自分を活かすことに自分の生き方を見出されたのではないかと思います。

結局、日本人と同じように日本語を話していても、生活言語が落ちてしまったり、複雑なことがわからないと、かなりのハンデを背負っているということです。高度なジョークがわからないというのは、この年代になっても、まだそうだっておっしゃっていたので、家庭の言語の影響は大きいのかなと思います。

では、そのためにどうすればいいのかですが、保護者の方が地域から孤立しているというのは問題だと思います。それから日本人の父親の教育への関与が少ない、外国籍の母親が日本語をよく話せない、家族関係が良くない、エスニックコミュニティに入れていない、このような部分は子どもだけを取り出しても解決できないですし、家族全体を支援する必要があります。例えば、何をもちて支援するといったかという、父親に進路ガイダンスに来てもらうとか、同じ地域の出身者同士のネットワークを紹介するというのも一つの方法だと思います。ロールモデルを提示する、先輩の姿を見せるというのも方法なのかと思います。

仙台では、第3回の研修会講師でいらっしゃる田所さんが、「外国人の子ども・サポートの会」を20

年以上やられていて、そこで進路ガイダンスを年に一回、開催されています。高校入学に関する情報を与える場なんですけど、いろんな工夫がされていて、先輩、お母さん同士もネットワークに入れるようにアレンジしますし、生徒さん同士もネットワークが作れるように場を提供しています。先輩を紹介するとか父親に来てもらうとか、いろんな仕掛けを作っています。その子だけを取り出して支援しても、なかなか難しいのかなと思います。これは地域や、家庭の問題につながっています。

私たちがボランティアをするとき、「子どもの日本語を教える」、「教科学習の支援をする」、もちろんそこが出发点ですが、その背後にはいろんな問題があると思います。例えば、お母さんに心理的な問題がある場合があります。これはもう心理の専門家に委ねるほうが良いかもしれませんね。子どもを取り巻く周りの日本語はどうでしょう。日本における中国のイメージが悪く、ネガティブ情報がたくさん入ってきて、自分の母親の国である中国を拒否する子どもがいます。日本の子どもの多文化共生教育の問題かなと思います。

教員は専門性を身につけなければなりません。そのためにこの講座もあるし、文科省の教員養成研修のためのプログラムもあると思います。必要なのはそういう人たちが連携を取りながら関わることです。

コーディネーターシステムを最初に作るのが大事なんじゃないかと思います。子どもさんを指導する前にまずコーディネーターシステムを作って、いろんな方と協力していくということですね。もう少し進んだ段階になると、資格を持った専門員が関わってきたり、行政によって法律ができ予算化されたりするということというのが、多文化共生の姿なのかと思います。今回の講座は資格ということまでいきませんが、専門性のあるという教員とか支援者という部分で一つ前進するかと思いました。

家庭、地域、言語環境、その子だけ取り出しても意味はなくて、総合的にネットワークを作り、情報が流通するような状況を作りださないと、根本的な解決にはならないという話をさせていただきました。

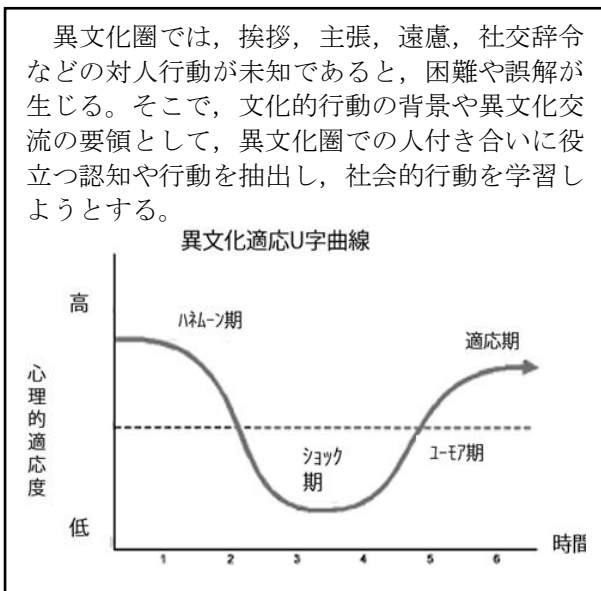
8 アイデンティティ

外国人児童生徒は、二つの文化の中で、どの文化に属しているのかの葛藤を生じ、自文化と他文化に対する認識は常に変化しています。さきほどの、マクマイケルさんの例もありますが、アイデンティティはクライシスを起こすことがあります。自文化が優勢になる場合もあるし、周りの文化が優勢になる場合もある。それは常にバランス関係にあるということになっていますね。

そうした中で、一つの方策として言われているのが、母語学習というものがあります。母語学習によって自尊感情を高め、情緒的な安定とアイデンティティの確立を支援するケースが見られるということで、母語支援の意味がまたここにもあると思いました。つまり自分の持っている母文化に対する周囲の評価があまりに低いとアイデンティティが構築できない。つまり、日本のクラスに入って行って、日本人のお母さんのお母さんの国の悪口を言う、そういう状況だと、自尊感情が高まらないということなんです。そういう中で、母語の学習とか母文化の学習をしていきます。そうした中で、さっきのエスニックコミュニティが大きく作用するのかなと思います。先ほどのエスニックコミュニティのいくつかで、母語学習を推進しています。

9 異文化適応

異文化では対人行動が未知であるので困難や誤解が生じます。



うまくいっているなあという時期とショックの時期があるということですね。マクマイケルさんの例ですと、鼻血を出したときティッシュを鼻に詰めて馬鹿にされ、それを3年間言われたというのがあります。マクマイケルさんの文化的規範がカナダの学校のものに合っていなかったということでした。そしてショックの時期を迎えるということになります。最初にカナダから徳島に移住した時期は、ハネムーン期ということになります。ひじょうに自尊感情が高まってひじょうにいい状況にありました。また、ショックの時期の波は一樣ではありません。マクマイケルさんの場合、思春期は二文化の間の葛藤に苦しんだと言っています。今は安定して過ごされているということです。これは、異文化適応U字曲線とかV

字曲線とか言います。実際には、この他にも、適応の姿はいろいろあると思います。

日本の文化は、ひじょうに同質性が高いと言われています。そういう文化に適応しなければならないので、なかなか自分自身の持っている母文化に対して、ポジティブな感情を持ってない児童・生徒さんが多くなっています。私の大学の中にも、お母さんがフィリピン人だったとか、あるいは本当は中国から編入したんだけど努力して国立の大学に入ったという生徒がいます。でもそういう子たちは、「私のお母さんはフィリピンです」とか「自分は中国語を話せます」とか言うと思いますか。ほとんどの場合、隠しています。私も聞かないから知らないです。本人も言いたくないです。自分の母文化やルーツを完全に消し去っているのではないですし、また将来どこかで活かすかもしれないですけども、なかなかポジティブな感覚を持ってないでいます。あるいは、日本人の前、マジョリティの前では話したくないという生徒さんも多いのかなと思いますね。

10 自文化中心主義

自文化中心主義というお話をします。「日本語を教えてあげるんだ」「日本文化を教えてあげているんだ」と、一見して親切に見えますが一方的な姿でしかありません。自分の育ってきたエスニック集団を価値基準として、他の文化を否定的に判断したり、低く判断したりする態度、思想が自文化中心主義です。もちろん低く評価している意識はないんですけども、「これを覚えなさい」「あれを覚えなさい」と言っているのは、上下関係が生じてしまっているし自分たち中心の発想なのかなと思います。そのことを完全に否定しているわけではありませんよ。

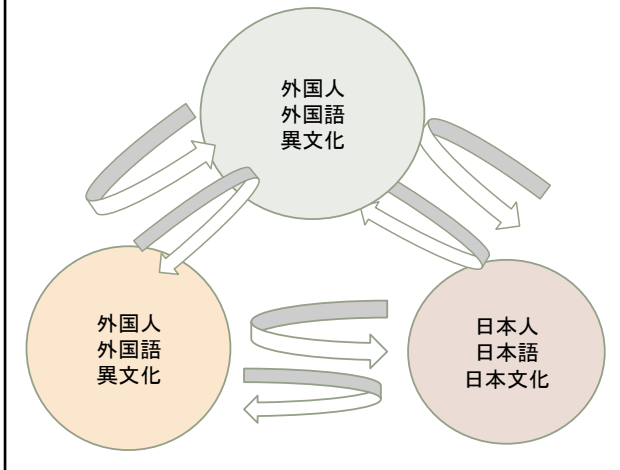
脱線になりますが、私は自分よりも年配の方と海外に旅行したことがあります。結構長い期間海外にいたので、年配の方は日本が恋しいんですね。行く先々で、食べ物を見るとすぐに、「これはうどんか」とか「これは梅干か」とか言うんですね。全部日本の食べ物に見えてしまうんです。別に悪いって言っているわけじゃないんですが、何でも自文化で判断しているという状況なのかなというふうに思います。

もう少しいろんな立場になってくると、自分の文化から相手の文化をみる、相手の文化から自分の文化を見るという練習ができるようになってくるのかなと思います。これは文化相対主義の練習の始まりです。

ただし、二つだけ、例えば日本と中国、日本と韓国というコンテキストではなく、もう少しいろんな文化と照らし合わせて、日本と異文化だけではなく、異文化どうしも照らし合わせてみるのも必要かなと思います。

多文化主義 3つ以上の文化間（多文化間）

文化相対主義（ぶんかそうたいしゅぎ、Cultural relativism）とは、全ての文化は優劣で比べるものではなく対等である、という思想自身の文化を相対的に把握したうえで、異文化と相手側の価値観をとらえ、その文化、社会のありのままの姿を理解しようとする。フランツ・ボアズによって提唱された。



具体的な話をしますと、私も留学生を結構長い時間教えてきました。中国の留学生が私の顔を見てこんなことを言うんです。「日本の料理は甘いです。中国の料理は甘くないです。砂糖は使いません」しかし、それは中国の東北地方出身だからでしょうということです。例えば蘇州とか広東の料理は甘いんですけれど、彼は自分の持っている背景文化しかわからないので、そういう判断をして言っているのかなと思います。

また、ベトナムからきた女子学生は、テキストで日本の学校ではいじめがあるという話を読んで、「私の国にはいじめはありません」と言っていたんです。「すごいですね。あなたの国にはいじめがないんですか」と聞きかえしたわけです。

こういった場合は我々の側ではなくて、相手（この場合は留学生の側）に多様な見方が育ってないのかなと言えるのかなと思います。ですから、このようないろんな文化の立場に立って振り返ってみるという練習をこのあとしてみようと思います。

11 日本語指導とキャリア形成

外国出身の児童生徒のキャリア形成を考えると、日本と児童生徒のルーツの国の懸け橋となることもいいですけれど、地域の人材だという視点にもっと目を向けていただきたいと思います。外国出身の児童生徒を将来的に地域で包摂していくという視点が大事です。

日本語教育としては、企業の求める日本語力を見極め、その子にとって日本語がどこまで必要かを考えていくことも必要です。そして、高い日本語力を必要としない職業の開拓（職人や専門職）も必要となります。

地域におけるキャリアを形成していくためには、受験勉強、国家試験や資格試験の対策も重要ではありますが、職場体験やインターン場の設定、人口減少や人手不足といった地域の困難な課題と外国人児童生徒のニーズを結びつけること、ロールモデルとしての先輩の経験を継承することなどが重要となると思います。そのためには、外部資金やプロジェクトの導入もはかり、地域の関係団体と多く接触し、認識してもらい、見守ってもらう必要があります。

宮城県で、農業従事者になったインド人の女子がいます。その子の出身の中学校は私の家の近くで、インド人の料理屋さんのお子さんです。中学校から農業高校に入りました。農業高校に入ってから、就農者の資格を取って宮城県の県北のほうに畑を借りました。周りは白菜とか大根とかキャベツを作っているんですけども、彼女はその畑でエスニック野菜を作ったんです。また、そこで作ったものを使って、レトルトパックの商品を作ったりしました。これが周辺の農家の活性化にもつながっています。こういうふうによりキャリアを築いてきたことは、本人にとっても地域への影響もひじょうに大きかったと言っています。これは、たぶん中学校の先生のアドバイスや農業高校の先生のご指導の賜物なのかなと思います。

これが、私が言っていた地域におけるキャリア形成ですね。この点について考えてみるといいのではないかと思います。

12 外国人児童生徒の困難さと今後の展望

本日の大きな課題は、外国人児童生徒の課題と展望です。これは我々の立ち向かっている目の前の課題であり今日的な話題だと思えますけれど、実はこれは循環しています。前からやっていることなんです。ただ我々が認識していないだけなんです。

外国にルーツを持つどれだけの方が今活躍されているのでしょうか。スポーツや芸能の世界、それからさっき言ったポケモンのソフトを開発された方も外国にルーツを持つ方でした。ミス日本2015年の方も外国にルーツを持っている方でした。そして我々の歴史的なヒーローですね。例えば大鵬ご存知ですか。お相撲さんです。お父さんはロシア人の方、お母さんは北海道の方。昭和のヒーローは外国にルーツをもつ児童生徒だったわけですね。そして今はどうでしょう。お母さんがフィリピンの御嶽海さん。別に本人はそういうことに重きを置いていないと思

いますが、でも、そういう時代を作ってきた循環の中での話であって、先ほどいろいろな事情を挙げて課題性ばかりを強調したかもしれませんが、そういうことではなくて、さまざまな可能性を秘めているし、これから社会を作っていく、一つの当たり前の行為なのかなというふうに思います。

それでは用語を中心とした話は終わりにさせていただいて、今度はワークショップを通して外国人生徒や異文化に対して、考えていただきたいと思います。

13 ワークショップ1

「文化相対主義や多文化共生について考える」

お手元のワークシート(多文化共生・文化相対主義練習)には、児童生徒、社会人、留学生も含めて、いろいろな異文化の事例が出ています。それを先ほどの文化の鏡に照らして、相手の立場について考えて、日本人はどう思って、外国人はどう思って、そこにどんなずれがあったのかを言い当てていただく練習をしたいと思います。

まずそれぞれのケースを黙読し、その後、どのケースでもいいですから、いくつかのケースを選んで、私はこう思うとか、こうだからこんな文化的な摩擦が起こったのではないかとか、それをお話しいただければと思います。

(4, 5人のグループで、ケース①～⑤を読み、気づきや解決策を話し合うワーク)

それではケース1、2、3、4、5とありますが、どこからでも結構ですので、こんな気づきがあったとか、あるいは解決策まで話していただいたところもありましたら、自由に出していただいて、いろいろな見方を養ってあげたいと思います。もちろんこれも日本人とか日本文化でも個人差あるでしょう。私は海外の人の見方に近いという人もいるんじゃないですかね。多くの文化ってパーセンテージの問題です。日本人だからとか、韓国人だからとか、そういう話ではなくて、そういう傾向の人が多いいというのが見られるということではないのかなと思います。では、どなたでも結構ですよ。気づきを教えてください。

ケース1

<受講者の気づき>

- ・アルコールが含まれている消毒液を使ったことがイスラム教徒にとっては許せなかった。
- ・ケガをした部位の問題もあるのかもしれない。
- ・アレルギーの子もいるので、外国の子どもに限ったことではない。むやみに薬を与えない。
- ・日本の学校文化を変えるきっかけにもなりうる。

<講師のコメント>

我々アルコールだけということを考えてしまうんですが、部位の問題もありますね。そこめくってよかったのか、病院に連れて行ったほうがよかったんじゃないか、いろんな判断の要素が入っていることが、今のご意見から気づきました。日本でも、いろんな子がいます。アレルギー対策も進んでいますので、アルコールを使っちゃいけないのはたいしたことではないということなんですね。今、学校でアルコールを使っていないということでしたが、水で洗い流すのですか。薬をむやみにあげない。それを基本原則にしていると、いろんなトラブルも起こらないんじゃないかな。ご本人で判断して病院に行ってくださいというふうに持っていくのが、いちばん重要じゃないかなと思います。私も勉強になりました。ありがとうございます。

ケース2

<受講者の気づき>

- ・おごる文化と割り勘文化の違い。教授に誘われたのだから、おごってもらえると思ったのかもしれない。
- ・教授より高い物を注文してはいけないと心配したかもしれない。
- ・韓国は年上の人が払うことが多い。

<講師のコメント>

外国の方にはわからないルールがありますね。上司の方と一緒に食べに行くと、上司の方が頼んだ物以上の価格の物を部下の方は頼んじゃいけないという、そういうルールがあったりするのではないのでしょうか。韓国の文化についてご存知の方がいれば教えてください。

次の時に他の人が払うので、全体的にはイーブンになるってということなんですね。このこともいろいろ聞く話ですけどね。日本人だと、その場できれいに清算しようとするんですが、韓国や中国の人だと、もう少し長いスパンでいたい等価になっていけばいいという。また、世代を超えて等しくなっていけばいいということですね。

また、中国の方からいっぱい餃子ももらった日本人が、これはたいへんだと思って、すぐにケーキか何かを返したら、中国の方がすごく戸惑ったという話があります。何が悪かったかわかりますか。すぐに返すとどのような気持ちになるんでしょう。あちらの方にとっては、すぐにその関係を終わらせたいというメッセージになってしまうということだったんですね。

ケース3

<受講者の気づき>

- ・洗濯機の使い方がわからなかったのかもしれない。
- ・シワになるから洗濯物を絞らなかつたのかも

しれない。

- ・プライベートなことなのに、会社の人から注意を受けたことに驚いたのかもしれない。

<講師のコメント>

そうですね。非常にプライベートな事でしょう。それがまわりまわって会社にまで知られてしまう。大事になってしまう。そこに恥を感じるということなんじゃないかなと思います。もし洗濯物で水滴が垂れるなら、下の人が廊下で挨拶したときに、ちょっと言ってくれるとか、そういうことですむんではないでしょうか。なぜ管理人までいって、会社までいって、そしてまた自分のところに戻ってくるのか。そのような自分の恥が大きく広がってしまっているということに対する疑問なのかなということです。

また、日本とヨーロッパは乾き方が違うと思います。いい加減に干しといても、内陸とか大陸ですとカラッと乾いてしまうというのがありますので、そんなことも影響しているのではないかなと思います。

ケース 4

<受講者の気づき>

- ・自分のことを言わないのに、人のことをたくさん聞いてくる。
- ・関係性を深めたい外国出身者とそれほど関係性を深めたいと思わない日本人。

<講師のコメント>

自分のことを言わない。自分のことを言わないというのは、何が問題なんでしょうか。自己開示の度合を調べると、日本人は自己開示の範囲が非常に狭いと言われていますね。海外でタクシーに乗ると、運転手さんが「おれの弟はねえ」とかいきなり弟さんの話で始まるとかあります。ここでは、自己開示をしないと、関係性が深まらないと感じたのかもしれないです。いい視点をいただきました。

ケース 5

<受講者の気づき>

- ・距離感の違い。
- ・自己開示をして距離を縮める時間が短い外国出身者と公私を分けた日本人。

<講師のコメント>

この学生は、すぐに自己開示をして親しくなりたいと考えたわけですね。

また、「あなたは学生、私は職員」という考えの日本人職員とそれを気にしない留学生。階層性の捉え方の違いもあるのかもしれない。

14 ワークショップ 2

「子どもたちのキャリア形成にかかわる事例研究」

(公財)宮城県国際化協会「外国籍児童生徒サポート事例集 多文化な子どもたちの未来をひらくために」

http://mia-miyagi.jp/pdf/kodomo_casestudy.pdf

今回は外国人児童生徒に関することについて考えてみたいと思います。宮城県で作られた外国人児童生徒のサポートの事例集をご覧ください。これを見ると、いろいろなケース、特に先ほどのキャリアの達成に関わるケースが出ています。そして、我々支援する側が、どんな支援を行ったかで、どういう達成が可能になったのかということが見えてくるのかなと思います。ただ、全部事例を読み込んでいくのは難しいので、偶数番号で 2, 4, 6 の事例を取り上げてみたいと思います。

それぞれ読んでみましょう。

それではまた同じグループで、彼らの課題は何だったのかと、どのような支援が効果的だったのかというのと、何が彼らの人生を支援する大きな要素になったのか、ということをお話いただければと思います。感想でもいいですし、もっといい方法があるとか、こういうのはうちにはないとかでも結構ですので、生徒の進路達成について考えていただければと思います。

(グループごとに話し合い)

本人の問題もあるかもしれませんが、外国人支援のみならず、どのようなチャンス、さまざまな社会的な場面に多く触れるということがひじょうに役立つのかと思いました。学校に行って教科の学習をすることは基本ですけれども、学校がいろんなところと連携していく、あるいは自分自身も社会教育施設に行って情報を集めるなど、そういった機会が、就職でも、進学でも、ひじょうに優位に作用するのかなと思います。ただ単に教室に勉強に行くだけではなくて、どれだけそういう機会を作るのかということが、進路達成の一つの大きなポイントなのかなと思います。

例えば、地域の技能を持っている人のところに弟子入りするというのも、考えられると思います。伝統工芸とかも継承者が不足しているわけです。現状ではたくさんのニーズが、地域にも生まれていると思いますけれども、なかなかそういうところとのマッチングが上手くいっていないと思います。それには本人の問題もありますけれども、機会をどう創出するのが大事です。最近、高等学校中心のお話ですけれども、社会に開かれた学校ということで、いろんな社会連携が模索されていますので、そういったものが、外国人の方の進路にも影響を与えてくれるといいなと思っています。

たぶん日本人の父親が教育への関与が少ないということですよ。これがかかなり進路選択の幅を狭め

ているのかと思います。一方で、この事例の父親はどのように進路指導の会を知ったのでしょうか。広報をただけだと、こういう外国人の方は来てくれませんので、協会さんの方でも、そういう人がいるよって聞くと、そちらに情報が届くように、苦勞されているということですね。広報を流しただけでは、そういう方には届かないし、また埋もれている人たちもたくさんいるということですね。

父親の参加、母親もそうなんです、これが一つ大きなポイントなのかなと、多くの今までの経験の中で出ているところですね。そこでご尽力されているというところが、よくわかりました。その他もう一つ言っていただくポイントがあるんですが、英語とか国際理解に興味があるか無いかと言うところですが、この部分はどうか？

国際理解とか周囲の興味関心が育っているかいないかで、その人のアイデンティティが生きてくるかこないかに差が出ます。それはご本人の問題もあると思いますが、周りの意識の問題でもあると、そういうふうに言ってくださいました。スーパーグローバルハイスクールとか、そういうところだと留学生も来るし、自分の存在がまた一つ有効なものとして認識されるチャンスがあるということでしょう。一方、普通科のケースでは、自分の背景を隠して、周りに溶け込もうとすることで、だんだん自分の良さも失っていくという部分もあるのでしょうか。国際理解とか英語教育とかについて否定的なセンテンスで言う方もいらっしゃるんですけども、有利に働く場合もあります。

国際理解を学校のアイデンティティにしているところもありますね。札幌に大通高校という高校がありますけども、あそこなんかは定時制ではありますが、多文化共生をスクールアイデンティティにして、たくさん外国籍の子や留学生を受け入れている学校もあります。そこまでいってしまえば、そういうところに入っていくということが一つのルートになります。私の知っている子も、韓国のお子さんですけども、推薦で九州の大学に入っていました。これみんな推薦ですよ。今AOとか推薦枠がかなり充実してきていますので、そういうところを狙っていくことが、一つの外国籍の子どもの進路達成の大きな助けになっているということが、読むとよくわかります。

小学校で担当されている方も多いと思いますが、ちょうど高校に焦点が当たっているので、ちょっと自分の担当ではないと考えている方もいらっしゃると思うんですが、いかに多くの外部との連携のチャンスを持つかというのが、ポイントです。もう一つは、大人がつながるといってもそうなんですけども、子ども自身も、母国の先輩がこんなルートでこの学校に行ったということを直に聞けるという母国の子どものネットワークも大切です。今後の研修で田所

さんがいらっしゃって、説明してくださると思いますが、そういう動きもあるんですね。「自分はここまでやって、大学院まで入った」「研究者になりつつある」とか「就職した」とか。そういう子がまた下の子の面倒を見るとかいう循環ができつつあります。そういう循環を作っていくのが、結構時間かかりますけども、子どもどうして本当に響きますので、重要なのかなと思います。

そちらに物理の話をしていただいた方がいらっしゃいましたね。高校の物理とか、中学でもいいですが、教えられますか。私は教えられません。忘れていまして。誰が教えますか、物理や数Ⅲ。我々大人でも無理だと思います。これは大学生の助けをもらわない限り、絶対無理なのかなと思います。ですので、実際こちらの「外国の子ども・サポートの会」では大学生を組織されています。うちの大学生も行っているんですが、そういう学生の助けっていうのが、ひじょうに大事だなと思います。また、大きな進路の分岐では大人が介入しますが、近い年齢の方のサポートが有効だと思いますので、ぜひ、大学生がサポートするようなシステムとかチャンスを作っておけるといのが、いちばん大事なのかなと思います。

そうですね、ぜひ「失敗の事例集」も作りたいと思います。ただ、何を持って失敗とするのかということもありますよね。人生長いですので、この時点では進学がうまくいかなかったかもしれないけれど、その後いろんな事業を始められる場合もあるのかもしれないし、うまくいかないで高校をドロップアウトしてしまったという例は収集できるかと思ったり、今度はそういう事例を皆さんと一緒に検討させてもらえればいいかなと思います。本人の意欲の減退とさつき仰っていただけましたけれども。

それでは最後にまとめですけども、少しピン트가外れてしまうかもしれませんが、教科の学習を進めるに当たって、一つ例示を付け加えたいと思います。さっき言っていた物理とか数学の話ですね。こちら、前回も福島で出させてもらった事例なんですけども、日本語の勉強のほかに教科の力をどうつけていくのか、というのが非常に重要なかなと思ったり。これは中国から帰国して、仙台の進学校の高校に入学したという成功事例です。誰かに教えてもらったわけではなくて、自分自身でその道を見つけていったということで、うまくいかない事例と何が違うのかというのが、よく書かれていると思います。ちょっと読ませていただきます。

「理科は用語を覚えるのは当たり前で、私にとって難しかったのは実験や観察の手順とか説明する記述問題でした。」理科の実験を実際にしていないのに、その手順とかを読み込んで答えなくちゃいけないということですね。「中学校は一年の途中から入学したので、やっていなかった実験とかはYouTubeで見

注意事項を覚えていました。」つまり目の前に実験室がないので、バーチャルで体験することを見出したわけです。「記述問題は日本語の文章を自力で作るのが不安で定期試験では文章を丸暗記していました。」最初はパターンを暗記して書いていったけど、でもそれでも外れるときがありました。「だんだん自分で作るようにして、塾の先生に添削してもらってそれで日本語の練習にもつながったと思います。」最初は覚えてしまう。暗記です。

「社会科は特に勉強するのに時間がかかりました。定期テストでは一時的に覚えていたので点数はさほど悪かったときは無くて」と書いていますが、つまり穴埋めなので、先輩から問題をもらったりして、その穴に何を入れるのかってやっていたんですね。「なんとなく勉強していました。ですが、実際には模試で一番点数が良くて」定期試験ではなくて模試って実力が出ますでしょ。「本当は語句の意味を理解していないことを認識して、教科書を暗記する勢いでノートに語句の意味をまとめていましたが」、つまり応仁の乱は何年に何々がというふうに、定義を覚えるようにした。これが第二ステップですね。ところが、「ただのまとめとなってしまい、意味がありませんでした。」

次に第三ステップです。「なので、勉強するときは、ある語句がわからないとしたら、どうしたらそうなったのかという経緯と、そこから何が生まれたのかという影響もセットで覚えたほうが、効率がいいと思います。それに時代の流れを認識するのもとても大切です。」つまり社会科でも、暗記じゃなくて因果関係、時代の中の流れ、これを使うことによって答えを導き出せるんだというふうに言っているんですね。どの時代に何があったのか、その時代の後にどの時代になったのかをしっかりと認識していったのです。「一見やる事が多くて面倒くさいと思うかもしれませんが、私の場合はするにつれ、気づくと知識がつながるようになり、最終的には勉強がとても楽しく思え、ハマっていきました。」

これ日本人の生徒にも読ませてあげたいですね。これはメタ認知力です。自分は何がわからないかを理解する。そういう子は伸びるんだと思います。そして、自分で学習方法を開発していきます。支援員の方に教えてもらいましたじゃなくて、YouTube 見てみたり、定義を書いてみたり、それでもだめなら因果関係を考えてみたり、これが本当の思考力なのかと思います。教科の勉強をただ単に日本語ということではなく、論理的に考えるための YouTube であったり、因果関係であったり、そういうものを獲得していく手法、これを教えてあげる必要があるんじゃないかなと、この文章から私は思いました。以上で事例研究は終わりにさせていただきたいと思います。

15 振り返り・共有

(日本語教育の経験がある人、ない人、混成のグループを作る。)

振り返りの時間です。今日の学習をもう一度振り返っていただきます。グループの中でトピックを決めてください。グループ内で、経験のある方と無い方でペアになって、経験をお持ちの方は、ご自身の経験をお話しいただいて、経験を持っていらっしゃらない方は、いろんな疑問を寄せていただくということで構いません。

我々の力だけではどうにもならない問題もいくつかあると思いますが、そういうことでもよろしいのかと思います。それではチーム名を決めてください。チーム名は何でしょうか？その後発表していただきます。

本日の学習項目（トピック）

1. 文化間移動
2. エスニックコミュニティ
3. 分散と集住
4. 学校・地域・家庭の言語使用
5. 多文化共生
6. アイデンティティ
7. 異文化適応
8. 自文化中心主義・文化相対主義
9. 社会参加、キャリア形成、ライフコース

【各グループの振り返り】

グループ①

トピック：多文化共生について

<受講生の振り返り>

ボランティアでやれることには限りがある。もっと教育機関や行政とつながることで、支援の幅が広がる。連携が大事だが、どう連携させるかが課題だ。

<講師のコメント>

ボランティアでやれることには限りがあるが、もっと教育機関や行政とつながることで、支援の幅が広がるが、連携に至っていないことのジレンマが出たということで、よろしいでしょうかね。そのジレンマを破る壁がどこにあるのかですね。

グループ②

トピック：社会参加・キャリア形成・ライフコースについて

<受講生の振り返り>

日常の支援が子どものキャリア形成についてまで

考えることに至っていないことに気づいた。
キャリアコースを見据えた指導の必要性を学んだ。

<講師のコメント>

キャリアコースを見据えた指導のお話をさせていただきました。発達段階があって、小さいお子さんを対象にされているということ。そういった事例を作っていて、どれだけ提示できるかということが、生徒さんの新たな展望につながるのかなあというのが、今日の皆さんのご意見でわかりました。

グループ③

トピック：学校・地域・家庭の言語使用について

<受講生の振り返り>

違うということを前提として接しないといけない。
母子間で第1言語が違っていると、感情がうまく伝わらない。そこでフラストレーションがたまる。

<講師のコメント>

非常に重要なポイントなのではないでしょうか。今日、私の家族の話もしましたが、娘は思春期ですが、自分が伝える感情的な言葉は母親には通じないんです。中国出身の母親はもちろん日本語1級だし、もっと上のレベルだと思うんですが、そういうことと感情を込めた話をするとは別の次元の話。検定試験とかそういう話とは別なのかと思います。フォーマルな話と、心理の中の話をするというのは、違った側面にあるのかと思います。それがフラストレーションになっているということを現実感じます。貴重なご指摘かと思います。言語使用の部分であまり触れられる部分ではなかったのかと思います。

グループ④

トピック：アイデンティティについて

<受講生の振り返り>

日本語を学びながら、継承語も保持しながら日本に溶け込んでいる事例を話した。
子どもの持つ文化を理解し、想定できる力を支援者が養う必要がある。

<講師のコメント>

わかりました。さきほどつながるものがありますね。受け手の側がさまざまなことを、想定できるような力、日本人の側で想定することを養うことの大事さということ、共通してお話いただけたのかと思います。なかなかそういうことに思いが及ばないということですよ。

はい、じゃあ今日の振り返りということで、経験のある方と、初めての方でグループを組んでいただい

て、いろいろお話していただいて、ありがとうございました。

事後課題

(公財)宮城県国際化協会の「外国籍児童生徒サポート事例集多文化な子どもたちの未来をひらくために」

http://mia-miyagi.jp/pdf/kodomo_casestudy.pdf

を読んで、

- ①児童生徒の抱えている課題
- ②有効な支援の方法
- ③疑問点があれば疑問点

について、A4紙1枚のレポートにまとめる